

アメリカの大学教育についての一考察

——一般教養教育（舞踊）を中心に——

A Note on Basic Courses of Higher Education in America

佐藤 俊子

Toshiko Sato

目次

はじめに：日本の大学における一般教養教育への逆風
アメリカは若者型の国
アメリカは教育大国
開かれた教育システム
リベラル・アーツ・カレッジの伝統
アメリカの大学における専門教育重視の異変とその後の動向
アメリカの大学と舞踊教育
言語を介しての舞踊の啓蒙

はじめに：

日本の大学における一般教養教育への逆風

かつて、一般教養教育の中へ舞踊を、という少なからず厄介な提案を持ち出したとき、筆者としてはたえず教育の原点へ立ち戻らなければならず、長年つきあってきた現状とのあいだでその調和に手間取った。とりわけ、次の2点は筆者の脳裏に居座り続け、去らなかった。

第1は教育とは何のためにあるものなのか？

その教育を通して、われわれは今、どのような人間像を期待し、どのような社会を作り出したいのか？ その目標達成のためには、どのような授業、どのような教授法、教材、クラス編成があるべきなのか？ どのような

知識をどのようなバランスで配置するのが価値あることなのか？ 等々の基礎的な問題。

第2は文字文化崇拝の長い歴史のなかで、とかく軽視、あるいは無視されがちな、文字以外の表現法に連なる芸術一般を重要不可欠な一般教養としてどう救済するか、の問題。解答はいまだ模索中であるが、この問題意識が以下の教育に関する考察の源であった。

現状は複雑である。日本の大学、とりわけ私学では18歳人口の激減期の訪れを眼前に控えて、いかなる工夫をもって生き残るか、改組転換に大わらわである。文部省の大学設置基準の一部改正は「学術の進展や社会の要請に適切に対応しつつ、特色ある教育研究を展開しうるよう」制度の弾力化を図ったという。「特色ある教育研究」に見合う新しい提案と

してヒューメンな演劇とか舞踊を押すのは今こそ好機かとも思う。

しかし、その一方、この数年のきびしい世情を反映して、「役に立つ学問」に焦点が集中している。目に見える教育効果の計り難い一般教養教育の縮小もしくは排除の動向が目立ち、卒業、就職の後、すぐさま役立つような専門教育の強化と拡充への要求が高まっている。

ともあれ、漠然としてすぐさま効果の見えない人間育成のための一般教養教育に対してはまさに逆風のシーズンとも言える。筆者がかつて学部移行までの2年間お世話になった北大の教養部も平成7年度から姿を消すことになった。戦後、半世紀続いた教養部とは一体、何だったのであろうか？ 役立たずの、むだな、廃止されて当然なしろものであったのだろうか？ 改めて内省を迫られている時期でもある。

従って日本の現状において、音楽や美術や体育のように、舞踊を一般教養教育として提案しようとするれば、通り抜けなければならない二つの難関がある。ひとつは今触れた近年の一般教養無用論との闘い。今ひとつは明治以来、とりのこされてきた舞踊を改めて大学の正規のカリキュラムとして導入するための闘いである。

日本の大学がこのような問題をかかえてもんもんとしているとき、なんの疑問も抵抗もなく、すでにダンス・カリキュラムを整備し、円滑に実施している1990年代のアメリカの大学の舞踊状況は私には驚異であったし、最大のカルチャー・ショックであった。そこでひとまずアメリカの大学における舞踊の進出状況をアメリカの大学における教育改革の歴史的側面との比較の観点から考察してみたいと思ったのである。

アメリカは若者型の国

「アメリカは存在しなかった。労働と流血と孤独と恐怖の四世紀がこの国土をつくった。われわれがアメリカをつくった、そしてそのプロセスがわれわれをアメリカ人——あらゆる人種に根ざし、あらゆる色をし、民族的には一見無秩序な新しい民族にしたのである。」

America did not exist. Four centuries of work, of bloodshed, of loneliness and fear created this land. We built America and the process made us Americans — a new breed, rooted in all races, stained and tinted with all colors, a seeming ethnic anarchy.

これはアメリカのノーベル賞作家スタインベック John Steinbeck (1902-68) の晩年のエッセイ集『アメリカとアメリカ人』(*America and American*, 1966) の一節である。かつて「存在しなかった」ところのアメリカに住むとき、人は現状維持 *Statis quo* という古典的哲学を離れ、無限の可能性を無限の空間に描く生き方を選ぶ。そこで人はなんでもできると思いはじめる。ヨーロッパにおいて成熟が望まれ、老年が尊ばれるのと正反対に、アメリカでは成熟も老年も拒絶され、若者だけが尊ばれる。アメリカがかつて存在しなかったように、アメリカにおいてすべての事象は存在せず、ただ刻々に生まれ、生成されつつあるのみである。アメリカ人も同様。彼らは過去においてアメリカ人であったわけではない。イギリス人であり、スペイン人であり、アイルランド人であり、フランス人であり、ドイツ人であり、イタリア人であり、ロシア人であり、そして日本人であり、と枚挙にいとまがない。彼らは彼らの祖先をも含

めて、それぞれの自由意志で、アメリカの巨大な大地を選び、アメリカに移住し、アメリカ人になりつつあるのである。刻々に「なりつつある」という意味において、アメリカは未来志向の若者型の国と言える。このことはイギリスの偉大な劇作家シェイクスピア William Shakespeare (1564-1616) の『ロミオとジュリエット』とそのアメリカ版とも現代版とも言われた『ウェスト・サイド物語』を比べてみるとおもしろい。『ロミオとジュリエット』では若い主役を含む数人を除けば、芝居の登場人物は大方老人であるのに、『ウェスト・サイド物語』では嫌われ者の警官として以外、大人も老人もほとんど現われず、若者一色、いかにもアメリカの脚色らしい。

過去に無縁の若者を支える理念は当然、古典的哲学ではなく、ロマン的哲学である。無限の可能性 *infinite possibility* への信仰、いかなる貧困、いかなる無学な境遇にも上昇の道は必ず開かれているのだという確信、そして変化 *change* と進歩 *progress* の理論である。アメリカの若者にとって、未来に対する限らない期待は今でもごくありふれた日常会話の領域である。たとえば――

「僕はね、今は貧しいけれど、頭がいいからね、大学を出たら働いて大金持になるんだ。お金がないと、なんにもできないからね。黒人だって助けてあげられないしね…」とおんぼろ車でフリーウェイを運転しながら話してくれたウィーバー大学の学生がいた。彼の話しぶりはいかにもアメリカ人らしい。現在の自分の姿はあくまでも暫定的なものであり、そのうち、きっと、もっとまじな自己存在にめぐりあう日のあることを信じて疑わない。彼はその若さにもかかわらず、アメリカ人らしくお金の尊さを知っており、かつそれを使ってなすべきさらに尊いなにかがあることまでをきちんとわきまえていた。私が東部へ移動

する頃、彼は夏休みに合唱グループで日本へ向けそうだとうれしそうに語っていた。

就職しようと、結婚しようと、子供が幾人できようと、あるいは運わるく離婚しようと、総じて彼らは明るく、元気がいい。人生はその終わる瞬間まで自分自身のものであることをわきまえており、決して可能性への挑戦を怠らない。つまり生涯を通して若者なのである。彼らにとって年齢など、ほとんどの場合、どうでもいいようだ。日本人のようにたえず年齢を先行させ、それ相応の固定イメージをあてはめなければ納得しないということはない。彼らにとって新しいことはまずよいことであり、新しい提案は大方、その場で受け入れられる。新しい思いつきは少々奇抜な方法でも臆せず実行する。それを止める者はどこにもいない。「試みに失敗はつきもの」ということもおのずとわきまえており、人が失敗しても誰もなにも言わない。失敗した当人も一向に沈みこまない。次のチャンスを持ってばいいだけのことである。

彼らは “Be a doer, performer, not a wisher, hoper, or critic.” と叫び続ける。もちろん、けたはずれに臨機応変で大ざっぱな doer たちはいいかげんで忘れっぽいところも多々ある。彼らの元気いっぱい OK! ほどあてにならないものもない。リコンファームはなにも航空券に限ったことではない。あらゆる約束にはリコンファームがつきものだ。「約束の日になってもなしのつぶて」など、日常茶飯事。これもまた、ほほえましい若さと受け取り、慣れるしかない。

アメリカは教育大国

若者を育てるのは教育である。若者型の国アメリカが教育大国であっても不思議はない。

日本列島を25箇所すっぽり飲みこんだような

途方もなく大きな大地に、およそ世界中の民族が集まって生まれた人工の国アメリカを象徴するものはおそらく星条旗だけと言ってもいい。星条旗だけがアメリカ中にいつでもどこでも祭日でもないのにひるがえり、「ここはアメリカです。あなたは今、アメリカにいるのですよ」と呼びかけている。あとは万事、各人各様に自力でやっていくしかない。しかし、彼らのスタート・ラインには自由と平等への強い信仰がある。1776年のトマス・ジェファソン Thomas Jefferson (1743-1826) の独立宣言の冒頭の一節、「われわれは自明の真理として、すべての人は平等につくられ、造物主によって一定の尊い難い天賦の権利を付与され、その中に生命、自由、及び幸福の追求の含まれることを信ずる」という名文はスタインベックの言う「労働と流血と孤独の四世紀」にいつも寄り添ってきた信念である。過去を持たず、未来空間にのみ理想——ジェファソンの大統領就任のことばを借りれば「人類最高の希望」——を描き続け、過去によってではなく、未来に手招きされながらダイナミックに動き続ける自由と平等の国アメリカにまず必要なものはなにか？

それは彼らの尊い理念を実現するために要する「力」を養うところの教育であり、その教育はアメリカをになって立つ人間すべてが平等に受けるべきものなのである。アメリカには建国のはじめから、イギリスの階級制度もフランスの強固なエリート主義も存在しなかった。すべてのごくありきたりの人間の可能性を伸ばすことが重要であり、そのためにこそ、すべてのごくありきたりの人間に教育の機会は均等に与えられなければならないのである。若者型の国にはそれにふさわしい教育と学校作りが疑念の余地のない急務だったと思う。

開かれた教育システム

過去を持たない未来主義の国アメリカでは、当然のことながら、未来を託する人間育成のわざである教育を重視するし、そのための投資を惜しまない。学校こそが「アメリカ人」という新人類を作るところだと理解しているからである。

独立宣言にもられた自由と平等の公約は東部にはじまる開拓当初から、広大な土地を切り開き、新たなコミュニティを作り進むとき、早い段階からたえず配慮されていた。自由と平等の公約のために、教育もまた機会の平等を前提とし、自由競争の対象として、常に万人に開かれていなければならなかった。「すべての国民のすべての子供に公教育の機会」を与えるということは教育の発足当初からの目標であり、マサチューセッツの植民地の教育は「民衆のための無月謝及び万人共通の教育」を最初から基本理念として出発した。教育はコミュニティのすべての住民の平等の権利であり、それにかかる経費はコミュニティのすべての住民によって負担されなければならない、という考え方は教育開始の時点からコミュニティ・カレッジ増設のめざましい今日まで変わっていない。

アメリカの大学は国籍を問わず、人種を問わず、年齢を問わず、過去の経歴を問わず、まさしく万人に開かれ、人それぞれの才能を十分に生かすチャンスを与えてくれる。努力しようとする者には一度ならず何度でもチャレンジのチャンスを与えようと身がまえている。人間の可能性を信じ、才能を伸ばし、開花させる手段としての教育をどこまでも信頼しているからである。

王様や貴族のいないアメリカで、知識や芸術が魅力的であるための最低条件は近づきやすいこと、普通の市民の手の届くところにあ

ることである。旧大陸では今もって少数者の手にある高等教育も、アメリカでは建国以来の民主主義に照らして、社会的、大衆的であり、アメリカ人に成長したいと願うすべての人々、アメリカ社会へ出ていくすべての人々に開かれていなければならないのである。すべての人を受け入れ、すべての人の成長を助け、すべての人に役立つことを強調する大学では、当然、旧大陸の大学のアカデミックな気取りとは無縁な、すべての好み、すべての要求に見合ったコース、旧大陸の大学では想像も及ばないような新しい科目、新しい学位が用意されたし、用意されやすかったと言えよう。

イギリスのオクスフォード、ケンブリッジ両大学が13世紀創設という堂々たる伝統と歴史を持つことは周知の事実である。しかし、以来イギリスにおける大学の増設は1827年創設のロンドン大学一校のみ、20世紀に入っても大学総数は1945年で17、1967年で45、ときわめて少ない。今日でもイギリスの若者は16歳で義務教育（5歳～16歳）を終了すると、その大半が大学へは進学せず、働きはじめる。つまりイギリスにおけるかつての厳然たる階級制度は長年、教育にも及び、パブリック・スクールやオクスブリッジに見られるように教育の特権階級による独占として尾を引き、庶民は高等教育のチャンスからまったく遠ざけられていたのである。

「イギリス教育史における暗黒時代」などと評される17世紀、18世紀のアメリカの教育はどうであったか？ そのくわしい調査はこの目的ではないが、アイビー・カレッジ8校中、7校までがこの2世紀間に誕生している。Harvard (MA, 1636), Yale (CT, 1701), Brown (R. I, 1764), Dartmouth (NH, 1769), Pennsylvania (PA, 1740), Princeton (NJ, 1746), Columbia (NY, 1754), いず

れも独立戦争（1775-83）以前の創設である。Cornell (NY, 1865) が19世紀半ばに創設されて、男子のための東部名門校が出そろおうと、これに対して早くも19世紀、女子のためのSeven Sistersの名で知られる名門7校Smith College, Mount Holyoke College, Bryn Mawr College, Wellesley College, Vassar College, Barnard College, Radcliffe Collegeが続々と東部に誕生している。1782年に書かれたフランクリンの『アメリカへ移住しようとする人びとへの情報』でも「大学は9校、すなわちニュー・イングランドに4校、ニューヨーク、ニュージャージー、ペンシルヴェニア、メリーランド、ヴァージニアの各州に1校ずつあり、皆、学識ある教授陣を備えている」との報告が見られる。筆者が勤務する北星学園の創設がアメリカの宣教師により、1887年というのもこうした比較の中においてみると、興味深い。かつて学校作りが宣教師の主たる仕事であったということも改めて得心できる。

また、これらのキリスト教の神学校に出発した私立大学に対して、「すべての国民のすべての子供」に教育を施す教員養成を急務とし、さらに自然科学などの学部を設置する州立大学も次つぎと作られるようになった。今日ではおよそ大学2000、短大1300、合わせて3300もの数にのぼる。その上、日本と違って、大学間の転学（transfer）の制度が整っており、単位認定も合理的に行われている。たとえば夏休みを返上して猛勉強すれば、9週間で一年半分くらいの単位を自分の所属する大学に持ち帰ることもできるのである。一端取得した単位は途中で病気になったり、お金がなくなって働かなければならなくなっても、いつまでも生きて、履修者を待っていてくれる。日本のような除籍はない。一生涯、大学と社会を往復しながら暮らすことも可能。

学年は問題にならず、単位さえそろえば、3年で卒業しようと、20年、30年かかって卒業しようとかわらない。州によってはまだ高校生であっても高校の単位がすべて終了しているときは大学に正規に登録して大学の単位を取りはじめることができる。つまり、大学にはどこかまだ幼い17歳という若手から60歳を越える退職組までおり、年齢はまちまち、大学はいつでもどこでも、文字通り万人に開かれているのである。アメリカの合理主義の一端である。

リベラル・アーツ・カレッジの伝統

大西洋の対岸のエリート教育とは対称的に、大衆教育路線を推し進めてきたアメリカの大学に、一般教育、ひいては生涯教育の概念が強く広くゆきわたっていることは言うまでもない。階級も序列もない新しい国家に生きることを決意した勇敢な人々の、誰にも必要な、誰にも役立つ人間形成教育の根城としてのリベラル・アーツ・カレッジが常に変らぬアメリカの誇りであったことも周知の事実である。未来主義の国を担う人間形成のための一般教養教育は大学が先端的学術研究と平行して果たすべき重要課題であり続けてきた。

その教育内容がただちに功利的有用性、つまり「役に立つ」実際的能力に転化するものではなく、むしろ、「見えないわたし」、あるいは「見えないあなた」に密着する、測定困難な能力の開発をうながすものであるとき、長期展望を欠く状況からは応々にして見捨てられがちではある。しかし、過度の専門化による弊害は誰も認めるところであり、調和のとれた知的、創造的個性の育成が新しい発想、新しいアイデアを生み、現状の困難をすら乗り切る力になることも古代ギリシャの昔から証明済みである。一般教養教育はアメ

リカを見習うまでもなく、青年期の人間形成に直接かかわる大学教育においては、いかなる時代であろうとも、常に普遍的教育課題であるべきものだと思う。

また日本の大学における専門分野に帰着する単線型教育の優先と、その路線からはずれるものへの疎外、さらに専門分野の交流や意見交換の皆無を思うとき、アメリカの大学における主専攻 MAJOR と副専攻 MINER の考え方、B. A から M. A.、あるいは Ph. D のそれぞれの専門分野が必ずしも一致しなくてもよいという弾力性は複数の視点を持つことの価値の認識に連なるものである。一個人の内部に貯えられた複数の視点はその相互作用を通して知的能力や感性をよりゆたかにし、視野の拡大と全体的人間像への自己実現を容易にする。ひとつの、しかもきわめて狭範囲の専門領域にこだわりの、その背景にひろびろと横たわる専門領域以外のすべての対象に向けられる知的関心がことごとく疎外され、あとまわしにされ、わずかに個人の趣味として、あってもなくてもいいゆとりとして、細々と生き続けるしかないような社会における創造的人間性の損失はきわめて大きいと言わなければならない。

アメリカの大学における専門教育重視の異変とその後の動向

このように、ひたすらリベラル・アーツ教育を誇ってきたアメリカ大学にも異変が起きた。なかでも最も衝撃的な事件は1957年のロシアの人類史上初の人工衛星スプートニク号の打ち上げの成功であった。それは明らかに宇宙競争におけるアメリカの敗北を意味した。それに続く、1960年代のベトナム戦争では、第1次、第2次両大戦で実力を示して以来、世界のリーダーを自負してきたアメリカがは

じめて苦戦の果てに勝利をあきらめて撤退したのである。いささかの自信喪失は言うまでもないだろう。その上、1960年代のアメリカには人口増加、環境汚染、都市問題、黒人問題、女性問題、ジェネレーション・ギャップの問題など、うずを巻いて山積していた。当然、植民の当初から教育を重んじてきたアメリカはこれらの問題解決もすぐさま教育改革に託していた。

宇宙競争における敗北にあわてたアメリカはまず何をしておいてもロシアに負けない科学技術上の人材の供給を最優先目標とした。伝統的一般教養教育を投げ出してでも、アカデミックな学問性の高い専門教育、とりわけ科学主義教育が連邦政府の支援を得るところとなり、社会的要請に応えるものとなった。しかし、当然の結果とはいえ、科学主義を推し進めれば進めるほど、科学や技術が人間を越えて、人間の主人になりあがってしまいますところに問題を残した。

切り替えのすばやさ、チェンジに対するあくなき情熱もまたアメリカ精神である。「なんでもとにかくやってみよう主義」のようなものが旺盛で、改変、改革は移住のはじめからの日常茶飯事である。チェンジの結果がよければよし、悪ければ自然消滅、さほどの汚点ともならない。アメリカ人にとっては、とりかえしのつかない失敗などはないようだ。前例尊重主義の中央集権型思考に慣れている日本人には、熟慮を欠くかに見えるアメリカ人の行動パターンはときに軽薄とも愚昧とも受けとられかねないところである。

ともあれ、科学主義最優先の弊害に気づいた全米教育協会（NEA、1857年設立された全米一の教育研究団体）は早くも1971年、「1970年代およびそれ以後の学校」*School for the 70's and Beyond A Call to Action*というレポートを出し、科学主義教育のゆきす

ぎを是正すべく、人間中心、人間主義教育の必要性を提唱しはじめた。

人間主義教育は決して知識教育を軽視するものではないが、知識の集積のみに片寄らず、身体的、情緒的、道徳的、美的、創造的分野をより重視しようというもので、「汝自身知れ」とか、「人間とは何か」といった一般教養の命題を再検討し、点数や成績では容易に計りにくい部分にも光を当て、人格の総合的育成をめざした。かなり手間取ったが、ここでようやく舞踊の出番が訪れたのである。

アメリカの大学と舞踊教育

『バレエの歴史』*Histoire du Ballet*の著者マリ＝フランソワーズ・クリストゥは「優劣はあり、洗練の度合いはさまざまであっても、舞踊は人間に簡潔で直接に訴える表現様式を提供する。ことばの世界が終わるところから、身振りの世界、舞踊の世界は始まる」と書いた。ことばの世界が終るところから始まる舞踊という表現形式は受身に流れることなく、常に真実の味方である。そこには言語表現にまつわるような、かけひきもはったりもない。舞踊表現はみずから進んで生きる意志を託することのできる能動的な創造であり、パーフォーミング・アーツの一形式であると同時に、創造力 *creativity* 育成のすぐれたメディアムとして十分に役立ちうるものである。ありとあらゆるものが教えられてあたりまえというアメリカの大衆型大学への舞踊の浸透はきわめて円滑に進んだ。東部と異り、大西洋の向う側の旧世界からの影響をほとんど蒙ることのない西部が舞踊学部の最先端を切ったのも決してふしぎではない。

アメリカの大学に初めてバレエ学部が誕生したのはユタ州の州都ソルト・レイク・シティ

にある University of Utah で、1951年のことである。今でも週3回はクラスを教えに現れるというウィラム・クリステンセンがその創設者である。全米で最も早くバレエ学部を作ったユタ州は、アメリカ人に言わせると、現在、全米一ダンスの盛んな州なのだそうである。

なぜユタにダンスが盛んになったのだろうかと漠然と考えてみた。私が通算1年余り、ユタに住んで覚えた感触から言えば、それはユタの人の心のやさしさではないかと思う。彼らは東部からイリノイへ、イリノイからユタへ、苦労に苦労を重ねてやっとの思いでソルト・レイクのほとりにたどりついた人々である。力を合わせて開拓に励んでも、アメリカの正式の州として認められたのはきわめて遅く、1896年。苦労の果てに助け合いを学び、苦労をのりこえながら心のあたたかさ、やさしさを貯えたのだと思う。そのヒューマニティと固く結びついて、身体を媒体とする芸術、全人格そのものの表出である舞踊がその素朴さのままに受け止められ、盛んになっていったのだろう。それはあたかも厳しい気候の北欧にやさしいヒューマンな旋律が誕生するのと同じようなものかもしれないと思う。

つまり人間の心が重視され、大事にされるところで確実にダンスが盛んになるということだろう。大学においてもまた、科学や知識に劣らず人間が重視されるとき、大学カリキュラムに舞踊が導入されやすいと見ていいだろう。

1970年代の人間主義教育復興の波の中で、舞踊が学校教育のカリキュラムに乗り入れるチャンスが到来したことはすでに述べたが、概してついこの間まで、アメリカにおいても日本における同じように、ダンサーも振付師も個人のスタジオとか、バレエやモダンダンスのカンパニー付属のスクールから輩出し

ていた。しかし、やがてアメリカの舞踊を志す若者たちは単なる専門的ダンス・トレーニングにあきたらず、これをなんとかより広いリベラル・アーツ、つまり一般教養と結びつけたいと望むようになった。中学、高校は無論のこと、大学で学位に連なる degree program の一環として舞踊を学ぶことができれば、この若者たちの目標は達成される。1970年代の人間主義教育の傾向に励まされ、さらには歴史学者、文化人類学者、哲学者らがやはり人間主義の観点から舞踊に注目するようになったことも、大学のカリキュラムへの舞踊導入に役立った。

1970年代から80年代にかけて、ダンス・エデュケーションは広大な全米の大学カリキュラムにどンドンめざましい勢いで普及した。大学のキャンパスに今見るような大劇場や実験劇場が奇妙な寄付者を得て次々と建造されるようになったのもこの頃からである。

万事はさほど古いことではない。舞踊が学問研究の対象として世間一般に認められるようになるにも時間を要した。現在、アメリカの高校や大学には多くの舞踊教師がおり、彼らの大半は今や少なくとも Master Degree は持っており、カンパニーのソリスト級のダンサーたちにも大学あるいは大学院出身者が多い。この辺りも旧大陸と大いに異なるところである。すでに半世紀近くをロンドンの Royal Ballet のリーダーとして貢献し、現在、全米でも五指に入る堅実なバレエ団 Ballet West の Artistic Director を勤める John Hart 氏は「アメリカのダンサーは大学を出てくるので、年をとっててね」とつぶやくが、それだけに大人の舞踊作品が生まれる可能性が高いと思う。

舞踊が大学のカリキュラムに導入されるとき、およそ三つの主要なタイプに分けられる。

Dance Education 舞踊教育：舞踊教師養

成コース

Performing Arts パフォーミング・アーツ : パフォーミング・ダンス・アーティスト養成コース

Dance Concentration ダンス・コンセントレーション : Physical Education や Fine Arts のような関連分野の専攻科目用の、それぞれの専門的準備のための必要を充たすダンス・コースからの選択

学生たちはそれぞれ試行錯誤を繰り返しながら、将来の方向を模索する。教師か、研究者か、パフォーマーか、振付師か、等々。

言語を介しての舞踊の啓蒙

舞踊行為そのものがもともと非言語コミュニケーションの形態であり、文字文化の外に存在するというところから、舞踊に関するもろもろの知識や事柄は容易に言語化も文字化もされにくい。舞踊家たちの感性も言語や文字から元来遠いところにある。世界中の本屋で最も少ない専門書のコーナーは例外なしにダンス関係の書棚である。

言語あるいは文字以前は概して漠然としたエモーションのレベルに留り、議論の場面では説得力に欠く。それで最近では、これも世界中、さまざまな舞踊に関する Lecture demonstration や Workshop が熱心に試みられる。いまだにバレエ劇場もオペラハウスも持たない日本から見れば、不動の伝統に守られて安泰そのものに見えるロンドンの Royal Ballet でさえ、コヴェント・ガーデンのオペラハウス内に The Education Department と呼ばれる、付属の学校とは別個の教育部門を設け、月に一回、少なくとも三ヶ月に一回は特別の教育番組を作製し、言語媒体も加味した啓蒙運動、STUDY DAYS とか DISCUSSION EVENING を提供し続け

ているのである。日曜日の STUDY DAYS は 10.30 am. から 4.00 pm. という長時間にわたり、EVENING ならば、7.00-9.00 pm. という時間帯。新作発表のシーズンならば、必ず振付師や芸術監督の話が聞かれるし、大学の教授やカムパニーの幹部が現れるので、誰でも彼らと直接話したり、質問したり、議論を交わしたりすることができる。いきなり大学の一般教養教育として舞踊を導入することが困難に満ちているにせよ、教育として真剣に取り組む場を設けていかなければ、正常な舞踊の発展も普及もありえないということを知っているからだろうと思う。

1970年代から80年代にかけて、アメリカで舞踊はパフォーミング・アーツとして、あるいは最も創造的な教育の媒体として、急速に発展し続けた。一人の教師による小さなスタジオから一流の職業的カムパニーまで、その数が急速に増加する一方で、それと平行して、college や university のカリキュラムに採り入れられたダンス・プログラムもその量、質ともに発展し続けた。ダンス志願の若者たちは他の専門を選ぶのと同様に、学位の取れるダンス・カリキュラムに挑戦することができるようになったのである。このような大学での系統的研究のおかげで、舞踊は文化的芸術様式としてのみならず、重要な教育媒体としても十分に認識され、人間形成教育の一端を担いはじめているのである。